

生活単元学習「なかよしハッピーまつりをしよう」
～野菜の収穫を祝って～

1 提案の主張点

本単元は、サツマイモを収穫し、食べ、祝うという児童の活動が主体となった生活単元学習である。一連の活動の中に、数える、計算する、表やグラフに表す、量るといった算数的活動が多く含まれており、この活動を児童の自然な意識の中に組み込ませていきたい。

障害のある児童にとっては、具体的な生活場面において学習を行うことで、活動に見通しを持ちやすく、より主体的に活動に取り組むことができ、数学的な態度の育成につながると考える。

そこで、学習過程においては、全員の共通の目標を持ちながらも児童の実態にあった一人一人の課題を設定し算数的活動を組み込んだり、一人一人のよさや能力が生かせるような役割を持たせたりする。また、共感性を高めるために、友だち同士お互いを認め合えるような場を設定し、相手意識も大切にする支援を行う。児童の成就感や満足感が自信につながり、次への活動の意欲付けとなり、生活に役立つ力（課題解決能力）をつけていくことができると考える。

2 提案に対する意見

一人一人の児童の生活面と教科面での実態分析をきちんとした上で、培いたい力を考えていたので、授業「ボウリングゲームでがんばったことをみんなに伝える」という中での一人一人の課題と算数的活動がすごくマッチしており、児童も自信を持って活動することができていた。

ビデオ視聴は、自分自身の活動を客観的にとらえることができ、役割を確かめるためにも効果的であった。

3クラス合同で大変にもかかわらず、教師は担当の児童だけを支援するのではなく、今の瞬間のある児童への関わりができていたのは、日頃の連携のよさがあるからだと感じられた。1時間の児童の課題の中にある、一瞬一瞬の児童の行動課題にも適切に対応できていた。

Q：生活単元学習にした理由は何か。

A：計算ができて生活の場面での力にはなっていないことと、けんかをしながらもこの時間は児童が好きであり、共感性を高める場には適し

ているから。

7人の実態が違いすぎる中での同じ活動というのは難しいが、ボウリングゲームは適切であった。より学び合いができるための工夫（友だちが言ったことをもう一度言ってみるとか禁止されなくても自分でするなど）が必要である。

3 御指導

(1) 生活単元学習（生単）の中での算数的活動の組み入れ方として

生単は活動が主体である。いかに意識の流れの中に自然に算数的活動を組み込むかが大切である。

なかよしハッピーまつりは、課題が明確になっており、生単の中に自然に算数的活動が組み込まれていたといえる。

一人一人への適切な支援が大切である。

7人7様の実態があるので、目標・支援・評価等すべて7人分があって、それぞれに応じた活動が授業に組み込まれていたといえる。

(2) 生単の中で共感性を培うために大切なこととして

生単の中での教師は指導者ではなくて、児童と一緒に活動する活動者でありたい。共に活動し、共感することで、集団としての意識が育つ。

(3) 障害児学級における算数的活動の3つのポイントとして

発達段階に即していること

具体物を対象物としてとらえるために、ボールを投げる活動を組み入れる等、児童の発達段階に即したものであることが大切である。

具体的な活動であること

ボウリングのように属性を抽出しやすいものがよい。

・ボールを転がす。・倒れたピンの数を指さして数える。・倒れたピンの数を表に書く。・得点を足す。・合計点から順位をつける。

生活経験と結びついたものであること

実生活の中で活用できるようにすることで、生活を豊かにしていくことができる。